

二十一世紀のための附属学校園の役割と展開

—専門委員会答申に込めて—

附属学校部長

溝上 恭

附属学校園の新時代

広島大学の附属学校園が、教育研究の進展のために果たしてきた役割は大きいものがあったし、これからも変わることはない。しかし、大学の統合移転は、学部と附属との距離を開くことになり、そのうえ、大学院改革へ大方の目が奪われるにいたると、附属学校園への関心は薄くなってくる。

こうした取り巻く環境の変化に対応し、附属学校園は、その本来の責務を自覚し、新時代にマッチした体質改善を行って、これからの広島大学にふさわしい附属学校園に脱皮する必要がある。この課題に対応するためには、自己改革をいかに為し遂げるかということである。

そのため附属学校運営委員会は、各種専門委員会に検討課題を諮問し、このほど、教育実習、教育研究体制、入学者選抜方法の各専門委員会から答申を得た。この答申は新しい附属学校園を創造するための指針とした。なお、附属学校部では答申書を含めた「白書」を作成中である。

自己改革への第一歩



(一)教育実習 養成課程・採用・研修というコースが教員を目指す学生のとる道である。最初の養成時に行う教育実習は、教育の現場に直結した実践能力を身につけるために必要不可欠なトレーニングであり、そこでは、基礎的・基本的な事項の修得に力点が置かれている。

特に、本学の場合、新キャンパスへの移転に伴い、学生が広島市の附属学校で実習に参加しようとするとき、通学と宿舍の制約を受けることとなり、実習への影響は無視し得ない。そこで、実習の充実のために安価で便利のよい教育実習生宿泊施設が必要となる。

(二)教育研究体制 附属学校園で行う研究は、現代の教育上の緊急課題を取り上げ、かつ、その研究成果が我が国の教育改革に反映できるようなものが望ましい。この点から現行の研究主題、研究組織、方法について改善の余地はないであろうか。

従来、附属学校園の研究に対して学部の関与は少なかったが、これを真の共同研究とするともに、教育センター、公立学校との連携をとることによって実践研究の幅を広げる必要がある。

広島女子高等師範学校附属中・高等学校と、広島青年師範学校附属中・高等学校とが合体したもので、百年以上の歴史を持った古い学校でもあります。

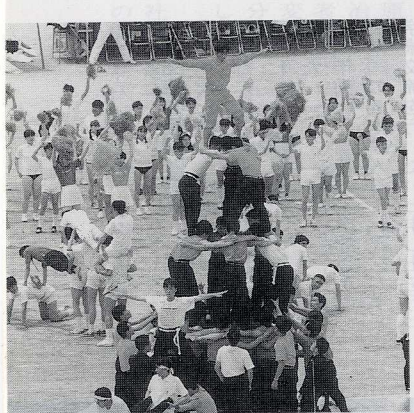
現在は、附属学校部に所属し、広島大学のほとんどすべての学部の教育実習を担当し、また主として教育学部との共同による教育の実践的研究や、文部省の研究指定校としての先導的研究を推進しております。

現校長は、広島大学(教育学部)附属校となつてから十二代目、千成俊夫教育学部教授です。

中・高六か年一貫教育

一九六二年(昭和三十七年)、全国の学校に先がけて中・高六か年一貫教育を実施しましたが、この一貫教育の理念は、青少年期における人間形成であり、学校運営はもとより、教科指導、生徒指導、その他あらゆる教育活動において、中・高という六か年を連続させ、教育の内容・方法・条件を研究開発していくこととしたものです。

したがって、当校では、中学一年生は単に一年生であり、高校一年生は四年生という呼び方をしますし、たとえば、学生会・クラブ活動や学校行事、



全校生徒による体育祭

創立以来の自由・自主の伝統的校風は、学友祭や体育祭などの学校行事やロング・ホームルームにおける人権学習(同和教育)など、学校のあらゆる教育活動の中に生かされていますが、一九六六年(昭和四十一年)より実施された、ベルやチャイムによる日課制限報知の廃止は、自由・自主の校風を象徴するものの一つといえましょうか。チャイムという規則によらず、学校中に配置された大時計や、生徒自身の判断で行動するという教育方針は、学

チャイムの鳴らない学校

これらの結果は、生徒の個人カードに累積記入され、中・高一貫の進路指導に利用されています。

と思われる。

また、平成六年四月に稼働するHINETの活用は、学部と附属学校園及び附属学校園間の情報交換の緊密さの増幅と、教育実践研究の面で、より一層の効果を挙げる事が期待される。

(三)入学者選抜(連絡進学) 現況では、大学進学制度の壁は厚く、附属学校園の連絡進学にも支障をきたしていることは事実である。しかし、附属学校園が教育実践研究を目指し、学生の教育実習を行うという本来の責務に立ち返って、連絡進学の基本原則をまず確立することが必要となる。

また、連絡進学を必要とする学部・附属学校園の共同研究の取り組みが大切になると思われる。

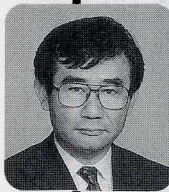
二十一世紀のための課題

附属学校園の自己改革は、自らの主体にかかわることであり、実施を伴わなければお題目を唱えることだけに終わることになる。実施に移すためには、短期的あるいは長期的な計画をたてるようにしなければならない。その場合、

附属福山中・高等学校は今

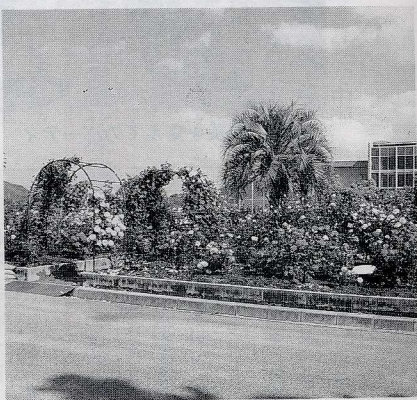
附属福山高等学校 副校長

落 健一



附属福山中・高等学校は、一九五一年に教育学部附属校として成立した比較的新しい学校ですが、前身は、一八

八七年(明治二十年)創立の山中高等女学校が国に移管されて設立された



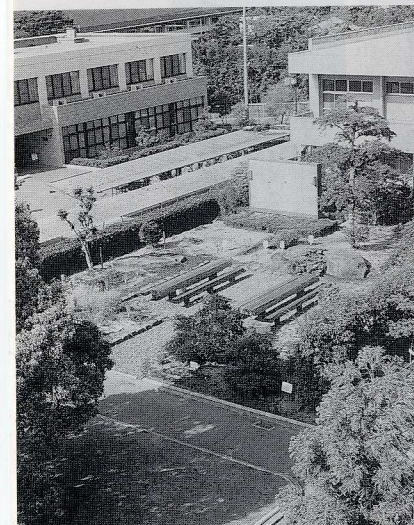
4大バラ園の一つ、福山附属のバラ園

校掃除においても福山附属方式ともいふべき形で実践され、昨年の全国附属連盟高校部会における研究発表で、一躍注目を浴びることになりました。

バラの街・バラの学校

「福山附属に過ぎたるもの三つあり。バラ園、オリーブ、副校長」と副校長が言うように、福山市の花、バラを学校の花として坂本事務官が中心となつて育て上げ、今では福山市のバラ公園などととも、四大バラ園の一つにまでなりました。校内と通学路沿いとに約一千株のバラが、春になると絢爛豪華に咲き誇り、教職員・生徒や教育実習生が楽しむのももちろん、観光バスまでが車を連ねて訪れるのです。

一九七三年(昭和四十八年)、福山市緑町から春日町に校舎移転をして以来、バラ園のほかにも、万葉樹木園、万葉草花園(昨年全附属PTA研修会で発表)と、緑の学校づくりもようやく完成に近づきつつあります。ちなみに春日の校地は、同窓会と教育助成会とが資金を集め、福山市の絶大な協力によって購入したうえで国に寄付した



万葉草花園とオリーブ

もので、それだけに、これら三者の当校に対する期待を、私たちはひしひしと感じているのです。

「オリーブ」は、当校のシンボルとして、旧緑町校舎、現春日校舎に多数植えられています。一九八五年(昭和六十一年)に新築された教育実習生宿泊施設の通称としても用いられています。

「オリーブ」での合宿方式の教育実習は、多くの教育実習生をして「人生で一番勉強した二週間」と言わしめるほどの教育効果を上げています。また「オリーブ」には、おいしいメニューをたくさん用意した食堂と、学用品を安く提供する売店とが併設され、教育実習生はむろんのこと、生徒・教職員の学校生活を豊かにしていますし、生徒の、クラスやクラブの合宿に、教職員の研修にと、多目的に利用されています。

ご招待

春になり、バラの花が咲く頃になりましたら、ぜひ一度、福山附属へおいでください。「オリーブ」のまごころ定食を、百花繚乱の「万葉草花園」で召し上がってみてください。みんなでお待ちしています。(おち・けんいち)